鳥取大学の諸問題(4)

――地域住民からみた鳥取大学――

教育社会学教室　後藤誠也

V―1 研究の概要

1 目的

① 前稿まで，入学者の出身地域構成および卒業者の状況から，鳥取大学がこれまで果してき，また現に果しつつある機能についてみてきた。本稿では，これに対応させて，県内高校について，高等教育需要の充足に果している鳥取大学の役割の現実と理想を把握することがねらいとなる。

② 本稿の報告では，このねらいの一部をとりだし，地域住民の「大学教育に関する調査」(1) として，計画したものの資料を扱うこととなる。この調査のねらいは，高等教育に対する地域住民の潜在的な需要を，量的，質的に把握し，それが実際にどのように充足されているか，また，地域に立地する国立大学に，この面で何が期待されているかを明らかにすることにある。

③ このような調査のねらいから，より具体的には，地域住民の意識の中に，鳥取大学が，どのようなイメージとして画かれているか，どのような期待が持たれているか，自分の子どもが大学に進学するとき，鳥取大学がどのような位置づけをされているかを，明らかにすることとした。

④ なお，この研究は，さらに高等学校の進路指導との関連で，鳥取大学がどのような位置づけと期待があるか，および県内リーダー層に対する，鳥取大学への期待によって補完されねばならない。これらすべての資料から，究極的には，「地方国立大学」が，いかなる地域的機能を果し，また果すべきかが明らかにされる。本稿は，前稿に引きつづき，この究極的ねらいの一環として位置づけられる。

⑤ 本稿は，「大学教育に関する意見調査」結果の一部についての報告であり，(2) 残余は機会をあらためて報告することとする。

2 方法

① 調査対象

調査対象は，現在高等学校普通課程2年に在学する男女生徒の父親とした。これは，とくに高校

(1) この研究は，東京大学の清水義弘教授を研究代表者とする高等教育研究会が，文部省の昭和46年度科学研究費による総合研究の一環として行なったものである。この研究は，秋田，山形，山梨，岡山，鳥取，徳島の各大学班の分担研究の形をとり，これに東京の総合研究班が加わり，総合的分析研究の体制で報告が行なわれるはずである。

(2) この報告は，昭和47年度の日本教育社会学会（於愛知教育大学）における研究発表の要旨を増補したものである。

生の父親が，鳥取大学にどのようなイメージと期待を持っているかを明らかにするためであった。

② 調査の手つづき

調査は，調査票を用意し，それに回答を記入してもらう方法をとった。対象者の決定には，時間と費用の点から，多段層別抽出操作を若干変容させた。その手つづきは下のとおりである。

ⓐ高等学校を選定した。高等学校は，普通課程を持つ県立高等学校の中から選んだ。この場合，できるだけ一定地域に集中しないようにした。こうして，県の東部より3校，中部より3校，西部より3校が，最終的に決定された。これは，一般に鳥取大学というとき，県の東端にある鳥取キャンパスを指すと考えられるので，イメージ構成に，地域的な差異のでることが予想されたためである。同時に，一方では，できるだけ，県下全域の住民の鳥取大学像を把握したいという意図からでもあった。

表1　高校別対象数と回収状況

地域	高校	対象クラス数	対象生徒数	回収数	回収率
東部	A	3	135	135	100.0%
	B	2	90	84	93.3
	C	1	45	42	93.3
中部	D	2	90	80	88.9
	E	1	50	49	98.0
	F	2	90	76	84.4
西部	G	2	90	70	77.8
	H	1	45	41	91.1
	I	2	90	82	91.1
計		16	725	659	90.9

注　回収数の中には回答不備（白紙回答）を除いてある。

ⓑ対象となった各高等学校に任意の学級の選定を依頼した。各高等学校には，全体の調査対象数の枠内で，学級数をこちらで決定し，その学級数まで，任意の学級を選定してもらった。選定された学級の生徒全数の父親が，この調査の対象者となる方式である。学級数の決定にあたっては，東，中，西各地域の対象数が，ほぼ均衡を保つように考慮した。

ⓒ調査票は，対象となった学級の生徒を通じて配布，回収された。

③調査期日および回収状況

ⓐこの調査は，昭和46年11月下旬から12月上旬にわたって行なわれた。

ⓑ各高等学校別の対象者数および回収状況は表1のとおりである。

V—2　結果の概要[3]

以下，概要としてあげる資料は，主として高等学校の所在地域ごとにまとめて作成してある。

1　回答者の属性

① 回答者

回答者は，あらかじめ父親に限定しておいたが，それぞれの家庭の事情等から，父親以外からの

(3) 以下にあげる結果に関連する研究は，これまでほとんどない。教育学，教育社会学関係での高等教育の問題は，主として大学等そのものが持つ問題点，あるいは，入試，就職等に限られていた（1）。その意味で，地域住民の地方国立大学に対する意識は，新しい研究領域として重要なものとなろう。

回答もあった。有効調査票659のうち571（87%）が父親のものであり，79（12%）が母親，9（1.4%）が兄姉その他であった。ここでの資料は，父親の回答のみについてのものである。

② 子どもの性別と出生順位

回答者の子どもは，男子53%，女子47%とほぼ同数に分かれている。また，出生順位（父親との続柄）は，長男が34%，長女が27%，次男以下19%，次女以下20%となる。

③ 出身地，現住所

県内出身者は全体で90%，県外出身者は10%であった。県内出身者も，高校所在地域付近の出身者が多く，流動性は小さかったといえる。県外出身者では，鳥取県に近い県の出身者が多い。現住所は，高校所在地域（学区）と一致している。

表2　父親の出身地

出身地／地域	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅰ 4	Ⅰ 5	Ⅰ 6	Ⅰ 小計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	小計	無回答	計
東部	44 22.2	141 63.8	2 0.9	5 2.3	1 0.4	2 0.9	200 90.5	12 5.4	3 1.4	— —	3 1.4	1 0.4	— —	19 8.6	2 0.9	221 100.0
中部	1 0.5	6 3.3	25 13.6	133 72.3	— —	1 0.5	166 90.2	8 4.3	3 1.6	2 1.1	— —	2 1.1	2 1.1	17 9.2	1 0.6	184 100.0
西部	2 1.2	3 1.8	— —	7 4.2	30 18.1	102 61.5	144 86.8	7 4.2	4 2.4	1 0.6	5 3.0	1 0.6	3 1.8	21 12.6	1 0.6	166 100.0
計	52 9.1	150 26.3	27 4.7	145 25.4	31 5.4	105 18.4	510 89.3	27 4.7	10 1.8	3 0.5	8 1.4	4 0.7	5 0.9	57 10.0	4 0.7	571 100.0

注　出身地区分はつぎのとおりである。
Ⅰ　鳥取県　1　鳥取市　2　岩美，八頭，気高各郡（東部）　3　倉吉市　4　東伯郡（中部）
5　米子市　6　西伯，日野各郡，境港市（西部）
Ⅱ　兵庫，岡山，広島，島根各県
Ⅲ　京都，大阪，徳島，香川，愛媛，山口各府県
Ⅳ　福井，滋賀，奈良，和歌山，高知，大分，福岡各県
Ⅴ　富山，石川，岐阜，愛知，三重，宮崎，熊本，鹿児島，佐賀，長崎各県
Ⅵ　新潟，長野，山梨，静岡各県および関東7都県
Ⅶ　北海道，東北6県

表3　父親の年齢

年齢／地域	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65以上	無回答	計
東部	5 2.3	62 28.0	91 41.2	37 16.7	9 4.1	4 1.8	— —	13 5.9	221 100.0
中部	5 2.7	52 28.3	80 43.5	24 13.0	8 4.3	4 2.2	— —	11 6.0	184 100.0
西部	1 0.6	58 34.9	62 37.4	26 15.7	10 6.0	1 0.6	2 1.2	6 3.6	166 100.0
計	11 1.9	172 30.1	233 40.8	87 15.2	27 4.7	9 1.6	2 0.4	30 5.3	571 100.0

④ 年齢，学歴，職業，年収

ⓐ年齢では45～49歳の層が最も多く，ついで40～44歳層となる。平均年齢は46.8歳，標準偏差は4.9歳である。

ⓑ学歴では，高小・新中卒（37%），旧中卒（36%）が多い。高等教育卒は全体の14%である

表4　父親の学歴

学歴／地域	高小新中	旧中新高	師範	旧専	大学	その他	無回答	計
東部	82 37.1	62 28.0	20 9.1	32 14.5	9 4.1	1 0.4	15 6.8	221 100.0
中部	61 33.1	84 45.7	10 5.4	13 7.1	7 3.8	— —	9 4.9	184 100.0
西部	70 42.2	58 34.9	9 5.4	16 9.7	4 2.4	3 1.8	6 3.6	166 100.0
計	213 37.3	204 35.7	39 6.8	61 10.7	20 3.5	4 0.7	30 5.5	571 100.0

が，鳥取市内の高校では28%と多くなっている。

ⓒ職業では，農林漁業が他に比べて多いが，その他は分散している。

ⓓ年収では100～150万円層が最も多い。全体の中位数は約127.7万円である。

表5　父親の職業

職業／地域	農林漁業	管理職	公務員	教員	自営業	経営者	事務職	技術職	工員	自由業	その他	無回答	計
東部	50 22.6	35 15.8	24 10.8	27 12.2	16 7.3	16 7.3	6 2.7	6 2.7	6 2.7	9 4.1	10 4.5	16 7.3	221 100.0
中部	46 25.0	22 12.0	28 15.2	15 8.1	9 4.9	15 8.1	6 3.3	9 4.9	12 6.5	6 3.3	7 3.8	9 4.9	184 100.0
西部	45 27.1	23 13.9	23 13.9	16 9.6	16 9.6	5 3.0	3 1.8	9 5.5	7 4.2	5 3.0	7 4.2	7 4.2	166 100.0
計	141 24.7	80 14.0	75 13.1	58 10.2	41 7.2	36 6.3	15 2.6	24 4.2	25 4.4	20 3.5	24 4.2	32 5.6	571 100.0

表6　年収

年収	なし	50万未満	50万～100万	100万～150万	150万～200万	200万～250万	250万～300万	300万以上	無回答	計
東部	— —	14 6.3	47 21.3	67 30.3	59 26.7	10 4.5	3 1.4	4 1.8	17 7.7	221 100.0
中部	1 0.6	5 2.7	37 20.1	72 39.1	42 22.8	9 4.9	2 1.1	5 2.7	11 6.0	184 100.0
西部	1 0.6	6 3.6	49 29.5	54 32.5	34 20.5	7 4.2	4 2.4	2 1.2	9 5.5	166 100.0
計	2 0.3	25 4.4	133 23.3	193 33.8	135 23.6	26 4.6	9 1.6	11 1.9	37 6.5	571 100.0

2　鳥取大学のイメージ

2－1　地元との関係における鳥取大学

表7　地元との関係における鳥取大学

地域＼意見	(1) 地元の高校生にとって入りやすい Yes	?	No	無回答	計	(2) 地元の発展に役立っている Yes	?	No	無回答	計	(3) 地元の必要にみあった人材を育成している Yes	?	No	無回答	計
東　部	31 14.0	57 25.8	132 59.7	1 0.5	221 100.0	116 52.5	34 15.4	70 31.7	1 0.4	221 100.0	63 28.5	69 31.2	88 39.8	1 0.5	221 100.0
中　部	21 11.4	41 22.3	122 66.3	— —	184 100.0	92 50.0	43 23.4	49 26.6	— —	184 100.0	57 31.0	59 32.1	67 36.4	1 0.5	184 100.0
西　部	42 25.3	41 24.7	81 48.8	2 1.2	166 100.0	93 56.0	30 18.1	42 25.3	1 0.6	166 100.0	50 30.1	61 36.8	52 31.3	3 1.8	166 100.0
計	94 16.5	139 24.3	335 58.7	3 0.5	571 100.0	301 52.7	107 18.7	161 28.2	2 0.4	571 100.0	170 29.8	189 33.1	207 36.2	5 0.9	571 100.0

①　地元の高校生にとって入りにくい

全体として地元の高校生にとっては，入りやすいと考えられていない。ただ，地域的には，西部が比較的入りやすいと考える者が多く，中部で入りにくいと考える者が多くなっている。

②　地元の発展に役立っている

地元の文化や産業の発展に役立っていると考える者が半数をこえた。ただし，鳥取市の高校では，「役立っていない」とする者が，他の高校に比べて多く（38%），ひざ元でのきびしい評価がめだっていた。

③　地元の必要にみあった人材の育成は？

人材育成については，意見，評価が分散した。ほぼ，地元の必要にみあうとする肯定とその否定と態度保留が，ほぼ三等分されている。この判断の根拠となる要因は複雑であるが，結果的には，鳥取大学の人材育成は，地元の必要にみあっているとはいいがたいようである。

2－2　鳥取大学のイメージ

①　施設・設備の充実度は何ともいえない

施設や設備といった鳥取大学の具体的イメージについては，約半数が積極的に判断せず，態度を保留している。「充実している」とした者は全体で28%と非常に少ない。

②　教授陣も充実していると積極的にいえない

これについては，62%という大量の者が判断を保留している。充実している，いないそれぞれ18%ずつで，この結果は，消極的にではあるが，むしろ充実していないとう判断のあらわれとみることができる。とくに東部という大学のひざ元で，相対的に高い否定傾向が，西部で低い否定がみら

表8　鳥取大学についてのイメージ

(1) 施設・設備は充実している

地域＼意見	Yes	?	No	答回無	計
東　部	71 32.1	103 51.9	45 20.4	2 0.9	221 100.0
中　部	51 27.7	79 42.9	46 25.0	8 4.4	184 100.0
西　部	38 22.9	90 54.2	34 20.5	4 2.4	166 100.0
計	160 28.0	272 47.6	125 21.9	14 2.5	571 100.0

(2) 教授陣は充実している

Yes	?	No	無回答	計
40 18.1	128 57.9	50 22.6	3 1.4	221 100.0
33 17.9	113 61.4	31 16.9	7 3.8	184 100.0
29 17.5	112 67.5	19 11.4	6 3.6	166 100.7
102 17.9	353 61.8	100 17.5	16 2.8	571 100.0

(3) 学生の質はすぐれている

Yes	?	No	無回答	計
36 16.3	117 52.9	65 29.4	3 1.4	221 100.0
33 17.9	97 52.7	49 26.7	5 2.7	184 100.0
34 20.5	89 53.6	39 23.5	4 2.4	166 100.0
103 18.0	303 53.1	153 26.8	12 2.1	571 100.0

(4) どの程度の大学か

一　流	二　流	三　流	?	無回答	計
27 12.2	153 69.2	19 8.6	18 8.2	4 1.8	221 100.0
37 20.1	118 64.1	11 6.0	16 8.7	2 1.1	184 100.0
27 16.3	103 62.1	16 9.6	19 12.0	1 0.6	166 100.0
91 15.9	374 65.5	46 8.1	53 9.3	7 1.2	571 100.0

れたのは注目すべきであろう。

③　学生の質，これも何ともいえない

学生の質はすぐれているという肯定意見は，教授陣についてと同様18％であるが，すぐれていないとする否定意見が27％でてきた。またここでも判断保留は半数をこえている。

④　鳥取大学は二流大学である

全体として，鳥取大学は，「二流」の大学であるという判断が示された。「一流」と考える者は16％であるが，この中では，中部地域在住者が最も多く，東部で最も少ない。「三流」と考える者も８％ほどある。ここに問題がでてきた。それは，「二流大学」という判断と「地元の高校生にとって入りにくい大学」という意見との関係についての解釈である。これは，大学としてのランクと入学の難易度とは，あまり密接な関係はないというところか。一般にランクについては，東大や京大という一流大学とは同等でない。したがって二流である。しかし，現実には，地元の高校生にとっては入りにくくなっている。こう解釈すべきか。ここにも，最近の入学者の地域成分の拡散現象による影響が読みとれる。(4)

(4)　この問題についてはすでに報告（3）してある。

④　全般的に鳥取大学の実情は知られていない

大学進学との関係で，鳥取大学をどのようにみているかは，入学の難易度，大学としての評価にあらわされるように，かなり確実なイメージが構成されている。これに反し，地元との関係や，大学の施設，教授陣，学生等については，判断保留が非常に多くなっている。このことは，鳥取大学そのものについて，じゅうぶんな判断材料を持ちあわせていないことを示している。あえて言えば，鳥取大学そのものが，まだ内容や機能面で，住民の中に浸透していないことを示す。このことの善悪，是非は別としても，もう少し，地元に具体的内容を知らせる努力が必要となろう。

3　鳥取大学のあり方についての期待[5]

ここでは，先の卒業生調査と同様，ひとつの項目について，地域性優先ないし重視の考え方を示す意見（地域志向型―L型）と，脱地域的な立場の意見（脱地域志向型―N型）をあげ，いずれを

表9　鳥取大学のあり方についての期待

(1)　教育機会について
甲：県民子弟を優先的に入学させるべきだ
乙：国立大学だから優先させる必要はない

(2)　教育方針について
甲：地元の発展に役立つ人材養成を期待
乙：広く国家社会に役立つ人材養成を期待

地域＼回答	甲に賛成	?	乙に賛成	無回答	計	甲に賛成	?	乙に賛成	無回答	計
東　部	121 54.7	19 8.6	81 36.7	— —	221 100.0	76 34.2	14 6.3	130 58.8	1 0.5	221 100.0
中　部	107 58.1	13 7.1	62 33.7	2 1.1	184 100.0	48 26.1	9 4.9	127 69.0	— —	184 100.0
西　部	101 60.9	10 6.0	55 33.1	— —	166 100.0	60 36.2	13 7.8	92 55.4	1 0.6	166 100.0
計	329 57.6	42 7.3	198 34.7	2 0.4	571 100.0	184 32.2	36 6.3	349 61.1	2 0.4	571 100.0

(3)　教育内容について
甲：地元の問題や要求をとり入れた教育を望む
乙：特別に地元の問題など考えた教育をする必要はない

(4)　地元への貢献について
甲：大学は大いに地元に役立つようにすべきだ
乙：むしろ広い全国的視野に立った教育・研究活動をすべきだ

甲に賛成	?	乙に賛成	無回答	計	甲に賛成	?	乙に賛成	無回答	計
76 34.4	24 10.9	119 53.8	2 0.9	221 100.0	118 53.4	12 5.4	90 40.7	1 0.5	221 100.0
61 33.2	17 9.2	105 57.1	1 0.5	184 100.0	76 41.3	10 5.4	96 52.2	2 1.1	184 100.0
53 31.9	17 10.7	96 57.8	— —	166 100.0	69 41.6	16 9.6	81 48.8	— —	166 100.0
190 33.3	58 10.2	320 56.0	3 0.5	571 100.0	263 46.1	38 6.6	267 46.8	3 0.5	571 100.0

(5)　このテーマは前稿(4)に示したように，鳥取大学卒業生に対しても同じ質問によって明らかにしている。

支持するかによって，あり方の意見を聴取している。ここでは，全般に態度保留が少なかった。現状はともかく，今後はこのようにあってほしいとする期待が，積極的な判断を示すことによって，明確にあらわされており，重要な資料となろう。

① 教育の機会

過半数が，「県民子弟が優先的に入学できるようにすべきだ」とする，地域志向（L）型の意見を支持している。これには地域による差はなく，県下全域にわたって，鳥取大学は，地元高校生の大学教育の機会として，重要なものであるという判断が示されたことになる。この判断傾向は，卒業生調査における県内在勤者のそれと同様である。

② 教育方針

人材育成の方向を示すものとしての教育方針のあり方を聞いている。この項目については，教育の機会とは異なり，脱地域志向が強く表現されている。すなわち，「国立大学なのだから，国家社会に必要な人材の養成を第一に考えるべき」とする意見が60％をこえている。ことに中部地域では，L：N＝26：69となり，東，西両地域に比べて，脱地域志向はより強い。

③ 教育内容

「地元の問題や要求をとり入れた教育」を望む者は33％で，過半数が脱地域志向を示す。この判断は，教育方針への態度と関連を持ってなされていることが推測される。鳥取大学では学生は卒業後，多くの場合県外に出てゆく。この傾向を考えれば，むしろ，地元の問題や要求にあわせた教育が行なわれるより，広く一般的な力がつけられるように行なわれることを望むのであろう。

④ 地元への貢献[6]

ここでの期待はL型46：N型47とほぼ同数で均衡している。地域別では，東部地域のL型が過半数となっており，中，西部とは逆の関係になっている。これは，大学の施設や教官の活用に，便，不便の理由によって起ったものであろうか。

⑤ 全般的な期待

学生に関する部分については，入学→教育→卒業の志向フローは，全体としてL→N→N型と把握しているようである。これより，鳥取大学は，鳥取県の人材をできるだけ多く入学させ，離村型の人材に育成してゆく機関として存在する，という発想があるように思える。地域との関連部分ではLN型である。これらの傾向は，教育学部の卒業生あるいは，土着型のフローを示した卒業生と軌を一にする，大学の将来像ということができよう。

4　大学進学予定と鳥取大学

4－1　大学進学の予定

①　子どもを大学に進学させたいと考える者は全体で80％，未決定は12％である。進学予定者のうち，すでに志望大学等が具体化している者は42％にのぼる。これらの数字は，鳥取県全体の実情より高めにでている。

(6)　この問題については，別の機会にひとつのテーマで発表しておいた（5）。なお，大学長等の意見については，国立教育研究所でのまとめ（2）がある。

② 志望大学等がすでに具体化している者については，いわゆる「地方大学」を決定している者が多い。ついで，東大，京大等をはじめとする，いわゆる「中央」の大学がでてくる。私立大学希望は意外に少なかった。

③ 学部については，工学部，教育学部が多かった。ついで，法経，文，医となる。現在鳥取大学にない学部を希望している者が，志望大学等決定者中32%ある。進学希望の学部を問題とするだけで，県外の大学を志望せざるをえない者が，かなりの数にのぼることが，明らかとなった。

表10　大学進学の予定

進学＼地域	予定している			予定していない	まだきめていない	無回答	計
	大学等を決定	大学等は未決定	小計				
東部	89 40.3	104 47.1	193 87.4	10 4.5	14 6.3	4 1.8	221 100.0
中部	60 32.6	89 48.4	149 81.0	8 4.4	26 14.1	1 0.5	184 100.0
西部	44 26.5	73 44.0	117 70.5	16 9.6	31 18.7	2 1.2	166 100.0
計	193 33.8	266 46.6	459 80.4	34 6.0	71 12.4	7 1.2	571 100.0

表11　進学予定者中すでに志望大学等の決定している者の状況

(1) 志望大学　　(2) 志望学部

大学・学部＼地域	「中央」の大学	全国的な大学	地方大学	公立大学	大学院を持つ私立大学	その他の私立大学	私立短大	無記入	法経	文	理	工	農	医
東部	26 29.2	4 4.5	50 56.2	— —	1 1.1	1 1.1	2 2.3	5 5.6	8 9.0	4 4.5	6 6.8	27 30.3	4 4.5	11 12.4
中部	7 11.7	1 1.7	39 65.0	2 3.3	7 11.7	1 1.7	3 5.0	— —	6 10.0	8 13.4	2 3.3	14 23.4	5 8.3	4 6.7
西部	8 18.2	3 6.8	25 56.8	— —	6 13.6	2 4.6	— —	— —	7 15.9	6 13.6	2 4.5	9 20.5	3 6.8	3 6.8
計	41 21.3	8 4.1	114 59.1	2 1.0	14 7.3	4 2.0	5 2.6	5 2.6	21 10.9	18 9.4	10 5.2	50 25.9	12 6.2	18 9.4

(3) 志望大学の所在地域

薬	教育	その他	無記入	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	不明	計
2 2.2	20 22.5	2 2.2	5 5.6	44 49.5	4 4.5	22 24.7	— —	1 1.1	8 9.0	1 1.1	9 10.1	89 100.0
2 3.3	15 25.0	2 3.3	2 3.3	24 40.0	11 8.4	12 20.0	1 1.7	3 5.0	5 8.3	2 3.3	2 3.3	60 100.0
— —	9 20.5	4 9.1	1 2.3	15 31.4	7 15.9	5 11.3	2 4.5	1 2.3	12 26.3	1 2.3	1 2.3	44 100.0
4 2.0	44 22.8	8 4.1	8 4.1	83 43.0	22 11.4	39 20.2	3 1.5	5 2.6	25 13.0	4 2.1	12 6.2	193 100.0

注　地域分類は　表2　の分類と同じ

④　志望大学の所在する地域については，全体で43％が鳥取県である。ついで，京都・大阪の20％，東京・関東の13％，中国地方４県の11％となる。この中でも，鳥取県については，東部が最も多く，西に行くにしたがって減少し，東京・関東方面が増加する。

4－2　鳥取大学に入学させたいか

①　「できることなら鳥取大学に入学させたいか」の質問には，表12のような結果があらわれた。全体では46％が「入学させたい」（土着性成分）としている。この場合，地域によって有意な差があらわれている。「入学させたい」とする者では，中→東→西と減少し，「入学させたくない」とする者は，またこの順序で増加する。この希望と大学進学の予定との関係をみると，土着性成分で予定者88％，離村性成分で82％，保留者で80％となっている。

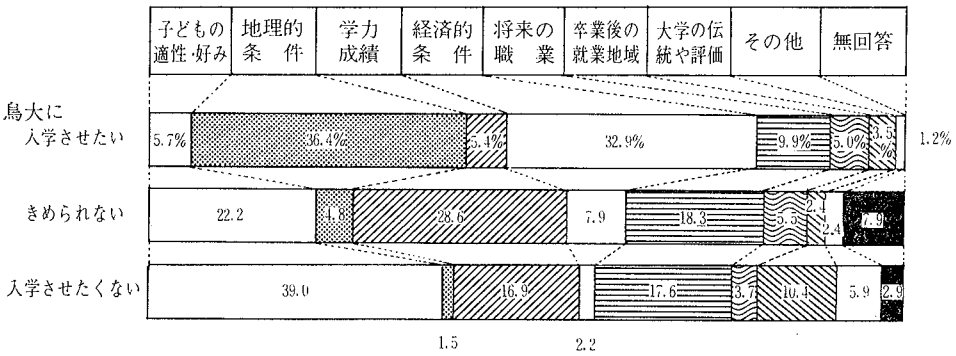
表12　　できることなら鳥取大学に入学させたいか

態度／地域	入学させたい	きめられない	入学させたくない	無回答	計
東　部	103 46.6	52 23.5	52 23.5	14 6.4	221 100.0
中　部	100 54.3	32 17.4	36 19.6	16 8.7	184 100.0
西　部	58 34.9	42 25.3	48 28.9	18 10.9	166 100.0
計	261 45.7	126 22.1	136 23.8	48 8.4	571 100.0

②　それぞれの希望別に理由をみてみよう。

ⓐ入学させたい（土着性成分）――「通学の便等の地理的条件」，「経済的条件」をあげる場合

図１　　鳥大入学希望とその理由



が多い。そのほかの理由は少数ずつに分散している。これは，地元にある国立大学なので，必要となる学費負担が比較的軽減されることから発想されるのであろう。また逆に，経済的条件が弱い故に地元の国立大学を希望するのであろう。

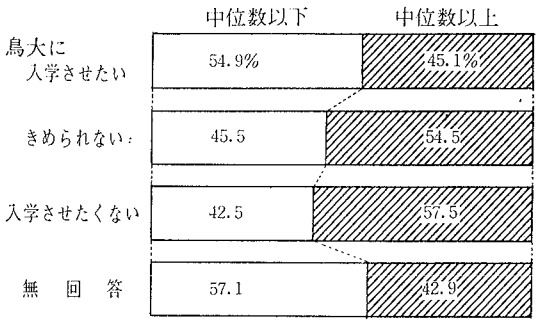
ⓑ入学させたくない（離村性成分）――「子どもの適性や好み」，「将来の職業との関連で」，「学力・成績」をあげる場合が多い。ここでは，子どもの高校での成績が，鳥取大学入学可能のレベルより高すぎるかまたは低すぎて，鳥取大学を志望するのは不適切であること，および，子どもの希望や将来の職業との関連で，進学しないほうがよいかまたは，他大学進学のほうがより適切であること，が理由となろう。これを裏づけるものとして二つの理由がある。ひとつは，「その他」として，「鳥取大学に子どもの志望する学部がない」があげられていることである。ひとつは，「

大学の伝統や評価，教授陣」を鳥大不選択の理由にあげていたこと（10%）である。これは，鳥取大学に負の評価をあたえていることになる。なお，ここでは経済的条件は，ほとんど問題にされていない。

ⓒきめられない（保留型）――ここでは「学力・成績」を理由とする者が多かった。これは，現在のところ，子どもの高校での成績が，鳥取大学入学可能性との関係で，態度決定を行なうのに，まだ不安があることによると思われる。ここでも，経済的条件は，ほとんど理由とはされていない。

③　このような態度表明と年収との関係をみてみよう。成分型によって有意な差はみられないが，土着性成分の年収中位数は120.8万円，保留型で134.3万円，離村性成分で 138.0万円となっている。これを大学進学予定者についてみるとつぎのようになる。「鳥取大学を志望している」者では，年収中位数125.0万円，「鳥取大学以外の大学志望」者では 142.5万円，「志望大学等未決定」者では134.9万円となり，有意な差を示す。こうして，地元国立大学志望者（土着性）の要因のひとつに，経済的条件のあることが明らかになった。

図2　鳥大入学希望と年収



注：中位数は127・7万円，年収無回答は除く

④　子どもの性別との関係については有意差はない。鳥取大学には，農，工，医，教育の4学部がある。このうち女子が比較的入学しやい学部は教育のみである。これについても定員は少なく，入学も容易ではなくなった。にもかかわらず，女子も男子もほぼ同じ割合で，入学させたいとする希望があらわれることは，注目してよい。鳥取大学が，女子にとっても，大学教育の機会として重要なものと考えられていることを示すものである。

⑤学歴と希望との間には有意な関係がある。「入学させたい」とする者では，高等教育卒の割合が低く（10%），「入学させたくない」とする者で高い（24%）。全般に，土着性成分では学歴は相対的に低く，離村性成分では高いようである。この学歴について，最終卒業学校の所在地をみると，図4のようになる。土着性→保留→離村性となるにつれて，県外所在の学校卒業者が多くな

図3　鳥大入学希望と学歴

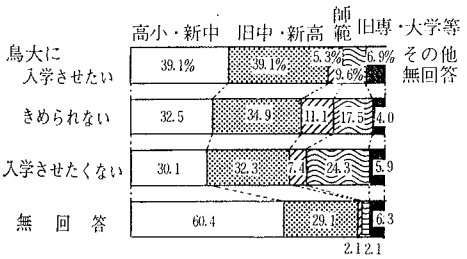
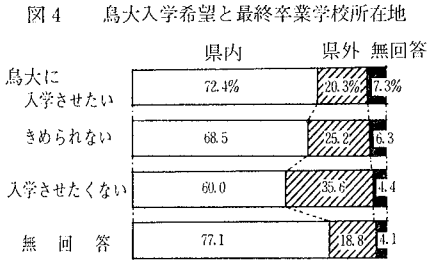


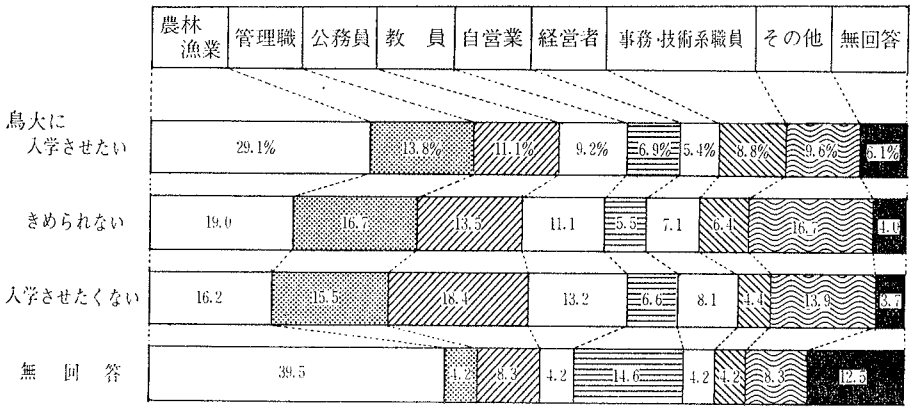
図4　鳥大入学希望と最終卒業学校所在地



る。

⑥　職業と土着・離村両志向への分化との関連は密接のようである。土着性成分では，「農林漁業」が相対的に多く，離村性の成分では，「公務員」，「教員」が多い。

図5　　鳥大入学希望と職業



5　大学教育一般について

①　大学教育の役割

表13　一般に大学教育の役割は何か

役割／地域	専門的知識・技術の習得	高い教養を身につける	高度の学問研究	学生生活を楽しむ趣味を伸ばす	社会の矛盾を追求する	学歴をあたえる	何の役割も果していない	その他	無回答	計
東　部	108 48.9	50 22.6	20 9.1	2 0.9	4 1.8	18 8.1	2 0.9	1 0.5	16 7.2	221 100.0
中　部	92 50.0	48 26.1	10 5.4	3 1.6	5 2.7	15 8.2	2 1.1	3 1.6	6 3.3	184 100.0
西　部	67 40.4	39 23.5	11 6.6	3 1.8	6 3.6	24 14.5	5 3.0	4 2.4	7 4.2	166 100.0
計	267 46.7	137 24.0	41 7.2	8 1.4	15 2.6	57 10.0	9 1.6	8 1.4	29 5.1	571 100.0

ここでは，ほぼ常識的な意見の表明となった。「専門的知識・技術を身につける」とする者が最も多く，「高い教養を身につける」とする者がこれにつぐ。なお，「学歴をあたえる」とする者が10%あったのが目につく。積極的に大学教育の役割を否定する者はごくわずかである。何らかの意味で，大学教育が一定の役割を果しているとの把握がなされているとみてよい。

②　大学が開放した教育機会を活用するか

大学が，地元住民に門戸を開放（公開講座，講演会等で）したら，その機会を利用したいと考えている者は多い。積極的に「利用する」と答えた者は18%あった。ここ数年，鳥取大学はこの種の

大学開放事業を行なっていない。もし行なえば，主題によってはかなりの受講者が，各地域ともあることが明らかとなった。この質問は，地元との関連での，大学の役割のひとつについて，住民の反応を問うたものである。ここにも地域住民と大学との関係を，現在以上に密接化したいとする希望や期待があらわされている。大学としても，こうした住民の期待にそうような機能を果すことが，今後望まれることになろう。

表14　大学が教育の機会を開放したら利用するか

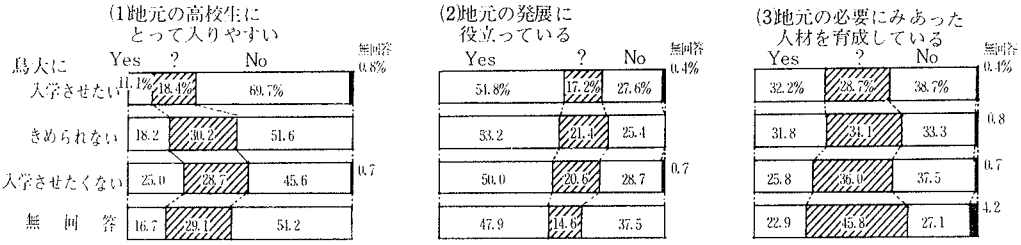
地域＼利用のしかた	ぜひ利用したい	できれば利用したい	何ともいえない	あまり利用しようとは思わない	まったく利用しない	無回答	計
東　部	32 14.5	91 41.2	53 24.0	30 13.5	2 0.9	13 5.9	221 100.0
中　部	40 21.7	71 38.6	37 20.1	21 11.4	6 3.3	9 4.9	184 100.0
西　部	30 18.1	62 37.4	38 22.9	17 10.2	5 3.0	14 8.4	166 100.0
計	102 17.9	224 39.2	128 22.4	68 11.9	13 2.3	36 6.3	571 100.0

6　鳥取大学進学希望と鳥取大学

6－1　鳥取大学のイメージと評価

①　入学の難易度把握

図6　鳥大入学希望と鳥大への評価(1)



土着性成分は「入りにくい」と考え，離村性成分は「入りやすい」と考える傾向が顕著であった。この傾向には，今回の調査項目に入っていなかった，「学力や成績」，「高校における進学指導の際の鳥取大学の評価」などであらわれてくることの影響が多分にあると予想される。

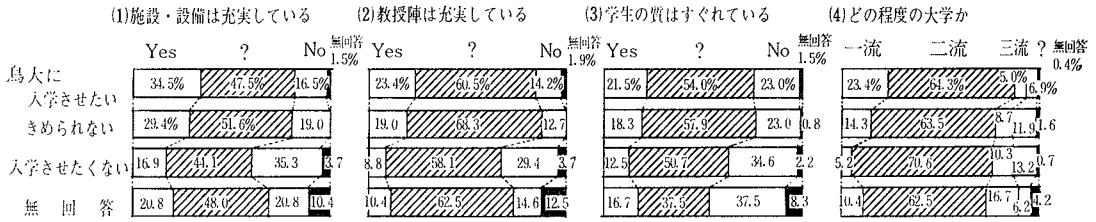
②　地元との関連

「地元の発展に役立っている」，「地元の必要にみあった人材を育成している」の両項目については，いずれの成分も，ほぼ同様の傾向であって，差異はない。

③　鳥取大学のイメージ

「施設・設備」，「教授陣」，「学生の質」については，土着性成分では相対的に好意的な評価を，離村性成分では非好意的な評価を行なっている。

図7　　鳥大入学希望と鳥大への評価(2)



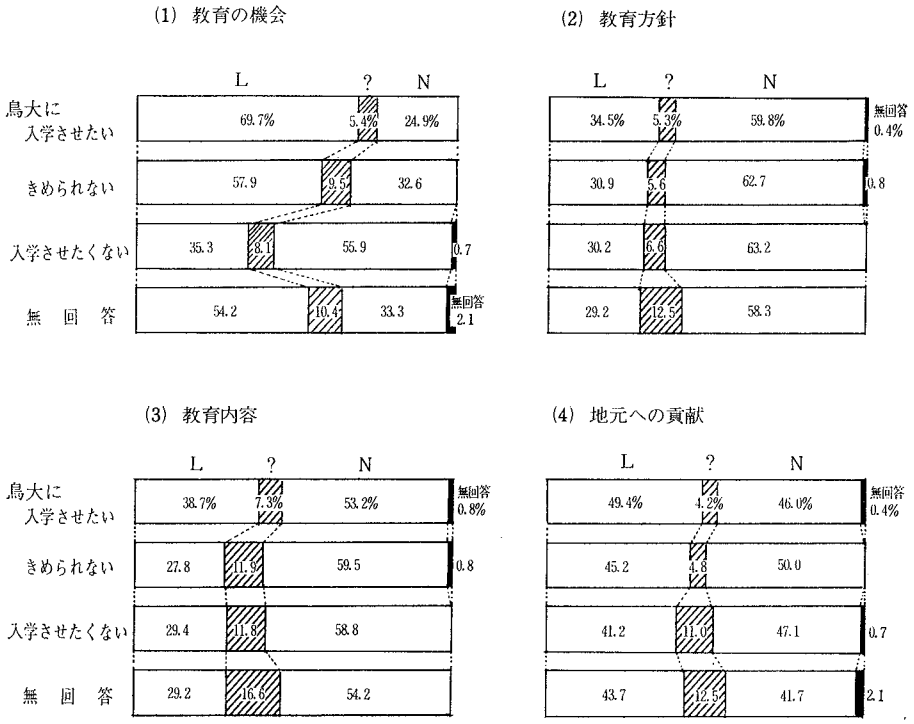
④　どの程度の大学か

いずれの成分も，「二流」の大学と評価する者が多い。しかし，「一流」大学と評価する者は，そのほとんどが土着性成分であり，保留型→離村性成分となるにつれて，この評価は激減する。「三流」大学とする者は無回答者に最も多いが，ここでも，土着性→保留→離村性と成分が変わるにつれて増加する傾向がみえる。

6－2　鳥取大学のあり方

①　教育の機会

図8　　鳥大入学希望と鳥大のあり方についての期待



注：Lは地域志向　　Nは脱地域志向を示す

土着性成分と保留型では，地域志向（L）型であるが，離村性成分では脱地域志向（N）型となっている。ことに土着性成分ではL志向が強い。この関係は当然といえるものであるが，回答者全体として土着性成分が多い（46%）ことで，鳥取県内には，まだかなり強い地元大学志向があるとみてよい。

② 教育方針

ここでは，成分による差異はみられない。これは，ひとつには直接に進学とは関係のない部分であること，ひとつには全体として，人材育成の方向が，脱地域を志向していることによろう。

③ 教育内容

前述のように，全般的には脱地域化傾向を示す。しかし，土着性成分ではややその傾向が弱まっている。この傾向は東部地域においてことに顕著であり，L：N＝41：48まで接近している。これに対し，東部の離村性成分では，L：N＝25：67で，土着性成分に比べて，強度のN志向を示す。

④ 地元への貢献

全体として，成分差による期待の差異はみられない。

6－3　鳥取大学像について

① 土着性成分

鳥取大学は地元の高校生にとって，入学はかなりむつかしく，一流もしくは二流の大学であると考える。大学への評価も相対的に好意が示されている。しかし，これは，大学進学の場合の対象としての好意的評価であって，他の成分に比べ，大はばな好意が示されているのではない。入学者の選抜にあたっては，強い地元優先が望まれている。

② 離村性成分

鳥取大学への入学は，それほど困難でなく，大学としては，二流もしくは三流だと評価する。さらに，大学への評価も，相対的にきびしいものとなっている。入学者の選抜についても，地元優先を否定し，「地元への貢献」を除き，かなり強度の脱地域志向を示す。この成分では，自分の子どもに関する限り，脱地域化を肯定し，地元大学の機能を，地元住民との関係において考えようとしている。これは，学校教育に関する部分と社会教育に関する部分とで，異なった発想をしているとみることができる。

③ 態度保留型

この型の者は，上の両成分の傾向の中間的な位置を占めている。

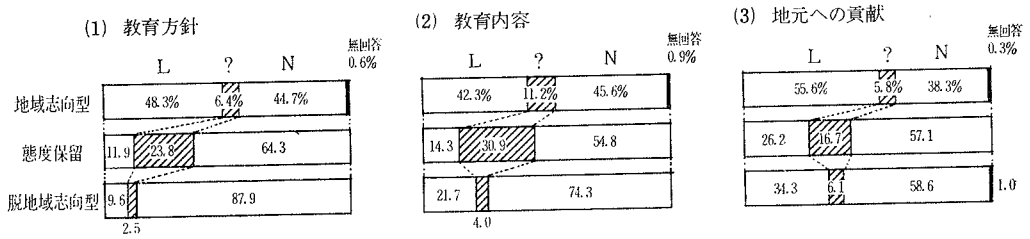
7　教育の機会についての期待と鳥取大学

① 教育の機会についての期待は，「鳥取大学に自分の子を入学させたいか」に関する態度表明より，より一般的な形での志向性を示すと考えられる。そこで，「県民子弟が優先的に入学できるようにすべき」とする意見支持者を，「地域志向（L）型」に，「優先する必要はない」とする意見支持者を，「脱地域志向（N）型」と分類してみる。この志向型によって，大学のあり方を分類すると，非常に顕著なある傾向が検出された。

② 大学のあり方の他の三つの項目すべてにわたって，志向型による有意差が検出された。

ⓐ教育方針――人材育成の方向性に関しては，地域志向（L）型ではLN型の傾向を示し，脱地域志向（N）型では非常に強度のN型（88%）を示す。「教育の機会」と「教育方針」との間に

図9　教育の機会についての期待とその他の鳥大のあり方についての期待



は，かなりの関連度があること（+0.333）も明らかにされた。

ⓑ教育内容――ここでもL型ではLN型に，N型は強度のN型にあらわれてくる。

ⓒ地元への貢献――ここではL型はL型（56%）に，N型はN型（59%）にあらわれる。これより，教育の機会でL型もしくはN型の志向を支持する者は，子どもの進学とは関連のない，この項目でも，同じ系列の発想から地元大学を把握することが示された。このことは，前節での鳥取大学への志向の成分によるものと若干異なった傾向である。

ⓓL型について――教育の機会でN型志向を表明する者は，大学のあり方の他の項目についても，一貫してN型志向をする場合が非常に多い。しかし，L型志向をする者は，教育内容と教育方針とで，L型とN型に折半されることがわかった。このことは，教育の機会としては，地元の国立大学を強く志望しても，その後，卒業までを展望した場合，土着志向の強い部分と，離村志向の強い部分とに分かれてゆくものとみてよい。この割合は単純にみて，ほぼ1：1と考えられる。

V―3 まとめと考察

1 鳥取大学のイメージ

① 鳥取大学はかなりの評価をえている。この結果は，当初の予想からかけ離れたものではなかった。ただ指摘できるのは，つぎのことである。大学についてのイメージには，地域による差は極端な形ではあらわれない。および大学の持つ象徴性については，判断材料を持ちあわせても，多くの場合，大学の現実の具体的姿をとらえているものではなかったことである。たとえば，「施設・設備」，「教授陣」，「学生の質」といった，鳥取大学の内容としての項目には，過半数が判断を保留していることである。内容をよく知った上での判断保留というより，ここでは，判断材料不足のための保留であったようだ。自分の子どもの進学する大学としてみた場合には，積極的な意志表示がなされているにもかかわらず。子どもの進学に直接関係しない限り，まだ単なる象徴性としてのもののように思われた。

② 大学のあり方については，つぎのことが回答から読みとれたように思う。近年，県民子弟の

入学が困難になってきている。このことが意識の中に浸透している。にもかかわらず，潜在的な鳥取大学インプット源はまだ大きい。それは，「県民子弟の優先入学可能となるように」とする期待の大きいこと，「鳥大にできれば入学させたい」と希望する者が多いこと，しかもそれは，経済的条件によって規定されていることで示されている。一方では，大学進学の時点から県外へ流出をはじめる傾向もみられることである。それは経済的条件がよく，また，学力・成績等や将来の職業を考えるとき，県内の大学でなくてもよいとする場合である。まだ不安定な要素だが，高校2年段階で，志望大学等の具体化している者については，鳥取大学：他大学＝5：7になっている。

③　鳥取県は大学卒業者を吸収する基盤が小さい。そこで，大学卒業後は，地元出身者も，多く県外に就職してゆかねばならない。この事情からか，入学後の学生の教育のあり方として，ある程度強い脱地域化が望まれている。

④　鳥取大学を，自分の子どもの進学する大学としてみたとき，前述したように，土着性成分と離村性成分の間には，ちがった把握がある。結論的には，土着性の強くなる要因として，比較的弱い経済的基盤，流動性のとぼしい種類の職業，はじめて高等教育をうけさせるという背景があげられる。

⑤　子どもの大学進学という条件をはずして，直接に県民と大学とのつながりはどうであろうか。「地元への貢献」についての期待では，約半数が必要と考えている。地元との関連での大学の機能の充実が望まれているとみてよい。ただ，今回の調査では，単に将来の期待として聴取したのみで，現実に，地元への貢献の実態や度合については把握していない。そのため，この結果が，実際にどのような意味を持つかが判然としない。というのは，「地元への貢献」についての期待は，実態との比較においてじゅうぶんな解釈が可能となるからである。たしかに，何度かの各種の事業に関連して得た感触として，社会教育サイクルでの，県民の大学に対する期待は大きい。これは，「大学が地元住民に門戸を開いたら，その機会を活用するか」の回答からも証明される。

2　鳥取大学の位置

①　鳥取大学に対する潜在的需要はまだ大きい

ⓐ自分の子どもの大学進学と卒業後を，鳥取大学を関連させてみると，意識としては，大別三つの流れとして把握できる。それは，大学進学の時点から脱地域的な発想で一貫させるN→N型(7)（一次離村型），大学だけ地元にするが，卒業後は離村を志向するL→N型（二次離村型），および一貫して地元を志向するL→L型（土着型）である。これらの型の割合の年次変化は，重要な問題点を含んでいるが，資料がないので不明である。今回の資料からみると，潜在的な形ではあるが，県民の意識の中では，N→N型：L→N型：L→L型＝12：10：11程度となっている。このことは，潜在的な鳥取大学への需要は，ほぼ大学進学予定者の⅔に達するものとみなければならない。もちろん，これが顕在化するときは異なった様相を示そう。同時に，ここにあらわれた父親の意識と，進学の当事者である高校生の考え方とは異なろう。

ⓑこのような個人的意識とは別に，潜在的な需要を，とくに惹起する条件がみられた。ひとつは

(7)　N→Nのうち前者は志望する大学の所在地域による志向をあらわす。ここでのNは脱地域志向で，鳥取県外を希望することを意味する。なお，Nに対置されるものがLで，鳥取県内を志向することを示す。後者のNは大学卒業後を展望した場合，子どもが大学卒の人材としてどのような志向性を持つことを希望するかをあらわす。

地域であり，ひとつは高校である。地域については，県の中部地域で，鳥取大学入学を望むという土着志向が強く表明されていた。ひとつの仮説としては，東部→西部と，ある程度具体的な鳥取大学志向は，弱まってゆくものと考えていた。これより，中部地域は，潜在的なインプット源の多いところと考えることができる。

ⓒ高校については，対象となった高校のうち，特定の群で強い鳥大志向がみられた。便宜上，対象校を，大学への進学状況，社会的評価などから，3群に分けてみた。このうち，Ⅱ群の高校では，鳥大志向が他群の高校より多かった（52：42）。同様に，大学のあり方においても，Ⅱ群の高校は地域志向性が強かった。教育の機会では62：52，教育内容では41：29，教育方針では37：29である。これは，入学→卒業までの流れは，他の群でＬＮ→Ｎであるのに対し，Ｌ→ＬＮ→Ｎであることを示している。

②　鳥取大学はこの需要をすべて充足させえない

ⓐたしかに土着志向，鳥大志向は強い。しかし，高校卒業の段階で，顕在化させねばならないとき，大きく変わるだろう。ひとつは志望決定の際に離村志向に変える場合，ひとつは，鳥取大学に入学できず，やむをえず離村志向に変わる場合。これが問題となる。ことに後者の場合をみてみよう。鳥取大学の近年の県内出身率，県内入学率(8)　は減少の途をたどっている。県内出身率では，35年→40年→43年→45年→46年となるにつれて，55％→46％→25％→24％→22％となっている。また県内入学率では30％→17％→12％→10％→６％となっている。これらの事実から，概略の充足率をみてみよう。

ⓑ大学進学予定者中，鳥取大学に入学させたいとする土着成分は，全回答者中約40％にのぼる。いま，４年別大学を志願するであろう県内高校卒業者は，2000～2300程度と推定される。このうち，800～900が，鳥取大学を志願するとみてよい。ただし，この40％は，資料としては，現実より若干高めにでていると考えられるので，30％に押さえれば，600～700となる。この数字は，近年の県内高校よりの志願者数にほぼ一致する。しかし，これだけでも，現行の定員600を上回っている。

ⓒ具体的に，42～45年の県内高校卒業者の４年制大学志願者のうち，鳥取大学を志願した者の割合は35％→39％→30％→25％となっている。年々，鳥取大学志願者比率の減少を考慮してみると，比率は20～25％の間におちると考えられる。20％のときは400～460，25％のときは500～580となる。

ⓓ鳥取大学について，県内出身率を，今後46年段階22％でとどまり，それ以下に落ちないと仮定してみる。と，定員600に対して県内出身者数は130～140ということになる。43～45年平均の25％と仮定すれば150程度となる。とすれば，潜在的に入学させたいとする希望者の期待は，17～25％しか充足させえず，また，予測される志願者数に対しては26～37％しか充足させえない。潜在的希望者の75～82％，予測される志願者の63～74％は，大学教育の機会をうるため，浪人して待っか，県外の他大学に流出せざるをえない。

---

(8)　県内出身率 ＝ $\dfrac{\text{鳥取県高校よりの入学者}}{\text{鳥取大学への全入学者}} \times 100$

県内入学率 ＝ $\dfrac{\text{鳥取大学への入学者}}{\text{鳥取県高校出身の４年制大学全入学者}} \times 100$

昭和46年度の資料については文部省（9）発表のものにより，他は（3）による。

③　流動性，離村志向は強まるだろう[9]

ⓐこのように，潜在的に相当程度ある土着志向性も，入学者の出身地域の広域化と県内出身率の低下から，強制的に離村成分化させられる可能性は高い。この状況から，進学問題が顕在化した段階で，鳥取大学を問題にしない，あるいは県外他大学へと方向転換してゆく者が多くなるだろう。大学のあり方への期待と，鳥取大学に入学させたいと考えることとは，たしかに密接な関連はない（+0.209）。鳥取大学に入学させたくないとする者で大学進学予定者は，全体の19%である。態度保留者の多くも，たぶんこの離村性成分化するであろう。

ⓑ大学のあり方の期待から考えても，一次離村：二次離村：土着＝12：10：11となっている。このうち，二次離村型は，顕在化する段階で，一次離村化することも考えられる。潜在的な状態で，まだ土着志向が強いといっても，今後は，流動性ないし，離村成分が増加することは当然考られてくるのである。この問題は，各高等学校での現実の土着，離村成分比をあわせて考えることにより，より明確に，鳥取大学の学校教育サイクルでの位置づけと機能がうきぼりにされるであろう。

参　考　文　献

1. 天野郁夫，新井郁男：高等教育に関する文献解題（「教育社会学研究」第26集），1971，pp 122—136
2. 国立教育研究所編：わが国高等教育の問題状況—「学長の意見調査から」—，1969，pp 53—56
3. 後藤誠也：鳥取大学の諸問題(1)（鳥取大学教育学部研究報告—教育科学，第13巻1号），1971，pp 213—230
4. 後藤誠也：鳥取大学の諸問題(3)（鳥取大学教育学部研究報告—教育科学，第14巻1号），1972，pp 103—133
5. 後藤誠也，木原孝博：地域社会と大学（「教育社会学研究」第26集），1971，pp 17—37
6. 清水義弘他：国立大学の地域的機能に関する実証的研究（東京大学教育学部紀要，第12巻），1971，pp 94—121
7. 友田泰正：大学入学者の地理的移動と地域別輩出率（「教育学研究」，第35巻4号），1969
8. 友田泰正：都道府県別大学進学率格差とその規定要因（「教育社会学研究」第25集），1970，pp 185—195
9. 文部省：大学・短期大学の所在地と出身高校の都道府県別関連について（雑誌「統計と教育」No. 171），1972—6，pp 54—45

(9) 直接鳥取大学に関連するものではないが，地方国立大学と地元高校との関係から，高等教育機会の需給関係についての研究で，参考になるものが若干ある。たとえば清水義弘他（6）の岡山大学の実態調査報告がある。なお友田（7，8）のものも参考になる。